

「まき」と遺伝に関する中高年の認識

齋藤貴子*¹, 三國志保*², 安藤広子*¹, 大谷良子*², 齋藤恵梨子*²,
由浪有希子*², 小野寺久美子*², 高橋利果*²

Perception of the middle-aged people about a relation between
‘Maki’ and hereditary disease

Takako Saito*¹, Shiho Mikuni*², Hiroko Ando*¹, Yoshiko Otani*², Eriko Saito*²,
Yukiko Yoshinami*², Kumiko Onodera*², Rika Takahashi*²

要 旨

東北地方における「まき」や血族・遺伝に関する中高年の認識の実態を明らかにすることを目的とし、東北地方3県に在住する50代以上の男女92名へ「まき」について質問紙調査を行った。

68%が「まき」を「遺伝」「遺伝+感染」と回答していた。「まき」にあてはまるものとしては、「脳卒中・脳梗塞」「頭がいい」「長寿」「結核」「色盲」「ハンセン氏病」と回答していた。「まき」への感情の変化としては、昔も今も良い感情と悪い感情の2つのパターン、昔は悪い感情であったが今は良い感情への変化のパターンの3つがあることが明らかとなった。家族が「まき」の方と結婚することについては、肯定派・決定困難派・否定派の回答があった。

医学の進歩に伴い恐れていた病気の原因などが解明され、「まき」の認識構造が変化していることが考えられたが、結婚では、「まき」を完全に無視できない中高年の想いも明らかとなった。看護職者は、現在ではあまり耳にしない言葉であるが、東北地方の文化的背景のひとつとして「まき」を意識し、多因子遺伝病があらたな「病まき」とならないよう正しい知識で病気を認識できるようにケアすることが課題である。

キーワード：まき, 遺伝, 中高年

I. はじめに

東北地方には、親族や血族を表す「まき」という言葉がある。若年層にはなじみの少ない言葉であるが、中高年層の間では今日でも使われている言葉である。

「まき」の言葉の意味は、広辞苑によると本家・分家の関係を持つ家同士を呼ぶ呼び名であり、同族・一族という意味で用いられる言葉で、東日本に多くみられる言葉¹⁾であった。また、柳田国男の族性語彙では、婚姻を含まず、さらに六親等以外の遠い同系も「まき」の中に入っている²⁾と解釈され、親類より広い範囲で用いられる言葉であった。「まき」は「まけ」や「まぎ」とも称されるが、本稿では総じて「まき」と称することとする。

「まき」には親族・血族などを表す本来の意味がある一方で、「まき」という言葉が、別の意味で使われている歴史的事実がある。「病まき」がそれであり、ハンセン氏病の意味でつかわれる「ドス」という言葉と組み合わせた「ドスマき」や、「結核まき」といったものがあつた。この「病まき」は、ある種の病気に罹った患者をかつて出した家であると認識されることにより、その家筋に生まれた人は、将来にわたって同様の病気にかかる可能性を持っていると考えられていた³⁾。その病気を伝える可能性のある一族という意味で、ある家族や一族を「病まき」と特別視され、病気を理由に周囲から疎外され差別されていた。

「まき」は公の場で語られるものではなく、家庭内でひそかに話題に上がるものであり、結婚

受付日：平成20年11月4日 受理日：平成20年12月25日

*1 岩手県立大学看護学部

*2 前岩手県立大学看護学研究科博士前期課程

話が持ち上がった際に、相手の血筋に問題がないか話題となり、どのような「まき」であるのかが重要視されていたのである。このことから「まき」は、かつて婚姻など血縁関係を結ぶ場面において、重要な問題であった。その根底には遺伝病を恐れる思いがあったからであると考えられる。

現在では「まき」は、ほとんど耳にしない言葉であり、研究者間でも聞いたことはあっても、意味を知った上で日常的に使う言葉ではなかった。しかし、かつて「まき」が人々の間で使われ、地域の言葉や風土、風習や俗習として存在していた。遺伝看護における対象を理解するためには、その帰属する地域社会や文化、価値観についての理解が重要であると考えられる。

以上のようなことから、医療が飛躍的に発展した現代の東北地区において、「まき」を知っている中高年が、この言葉をどのように認識し、遺伝を「病まき」や「まき」として捉えているか、また婚姻における場面においては、「まき」がどのように意識されているかを知ることは、時代と認識の重なり具合を知る上で重要だと考える。加えて、看護職が「まき」についての知見を得ることは、遺伝相談活動のみならずおおくの対象理解の場面において、文化や価値観、信念といったスピリチュアルな視点を深めることに役立つと考え、調査を実施した。

II. 研究目的

東北地方に在住する中高年の「まき」と遺伝に対する認識の実態を明らかにすることを目的とする。

III. 研究方法

1. 調査対象

東北地方に在住する50代以上の男女92名。

共同研究者が東北地方の3県に在住していたため、それぞれの居住する近郊地域の病院、老人保健施設、自治会の集会、勤務先にて対象者を募集した。

2. 調査方法

1) 質問紙作成

質問紙作成にあたり、文献検討とプレテスト、研究者間での検討を行った。

プレテストは、対象者を研究者の家族・勤

務先の同僚、勤務先で関わる人とし、「まき」という言葉を知っているかどうか、「まき」についてどのような認識があるか、口頭による調査を行った。結果は、東北地方の中で地域ごと、また年代ごとに認識の差があった。若年層(20代から40代)では、認識が低かったため、本調査の対象を50歳以上とした。また「まき」の使い方として、プレテストを実施した公共の場面で話題となることを嫌がった対象者もいた一方、「病まき」の意味で使われていない地域もあることが明らかとなった。

プレテストの結果を受け、研究者間で質問紙の項目や内容、質問の選択肢について検討会議を開き、内容の妥当性を検討した。

2) 調査内容

調査内容は、①対象者の年代②性別③「まき」という言葉をどのように感じるか(選択肢より単数選択)④「まき」という言葉からイメージするもの(選択肢より複数選択可)⑤「まき」にあてはまる病気(選択肢より複数選択可)⑥家族が「まき」の方と結婚することになったときどう感じるか(自由記述)⑦今現在の「まき」に対する感情(自由記述)⑧「まき」に対する感情の理由(自由記述)の8点とした。

自記式質問紙による調査とした。対象者が高齢である場合を考慮し、調査内容の5点は選択肢とした。

3) 調査票の配布・回収方法

配布・回収は、研究者が自ら配布しその場で回収する方法、研究者が配布し後日研究者が留め置き法にて回収する方法、対象者を募集した施設へ配布・回収をすべて依頼し研究者へ返送する方法を併用した。なお配布・回収に際しては、個人が特定されないよう対象者に調査用紙記入後個別の封筒に封入してもらった。

4) 調査期間

2006年12月から2007年1月。

5) 分析方法

設問のうち選択による回答は単純集計とした。また自由記述は記載された内容より意味を損ねないよう研究者間で項目や内容を検討し、パターン化した。

IV. 倫理的配慮

研究の主旨、回答は自由意志であること、回答内容により不利益は生じないこと、個人が特定されることはないことを説明し、研究参加への意思確認を行ったうえで同意を得た。「まき」について話題にすることについては、対象者によっては不快に思うことあることとあると予測されたため、研究協力を依頼する際に、「まき」について話題にしてよいか研究協力施設に確認を取った。対象者への説明については、原則として個別に説明を行い、一斉に説明する際には言葉の表現や説明内容について慎重に配慮した。研究者が自ら配布する場合は、研究者が説明した。郵送法の場合は、研究依頼施設の担当者に対象者への説明を依頼し、同意・協力を得た。

V. 結果

1. 属性 (表1)

研究協力者は、92名であった。

2. まきと聞いてどのように感じるか (図1)

68%の人が、「遺伝」「遺伝+感染」と回答した。

「その他」は23%であり、その詳細は、21名中11名が「一族・親戚・血筋・家系」と回答しており、「まき」の本来の意味で受け止めていることが分かった。

3. 「まき」にあてはまるもの (表2)

次に、「まき」にあてはまるもの (複数回答) は、「結核」「らい病 (ハンセン氏病)」など、昔から「病まき」の意味でつかわれていた病気も回答されたが、それ以上に「脳卒中・脳梗塞」の回答数が最も多く、「頭がいい」が次に多い回答であった。また、「頭がいい」「長寿」など病気とは直接かわりのないプラスの特質を「まき」にあてはめていることが明らかとなった。そして「精神病」や「知恵遅れ」「ばか」「白痴」など精神疾患や認知機能障害を意味する回答もあげられた。

明らかな遺伝性疾患である「色盲」や「牛眼」をあてはめている人もいた。多因子遺伝病である「脳卒中・脳梗塞」をあてはめていることが明らかとなった。

4. 「まき」からイメージするもの (図2)

「まき」からイメージするもの (複数回答) は、「血筋・家系」が82名であり、「病気」と回答した者は17名であった。「良いイメージ」14名と「悪いイメージ」24名とであり、悪いイメージに該当する回答が良いイメージに該当する回答を上回っていた。

5. 昔と今の「まき」への感情の変化 (図3)

「まき」への感情が、昔と今では変化があるかという質問の自由記載の回答は、3つのパターンに分類できた。

第1のパターンは、昔も現在も「まき」に【良い感情を持っている】パターンであった。第2のパターンは、昔は【悪い感情】を持っ

表1 対象者の属性 (N=92)

		(%)
性別		
男性	43	(47)
女性	49	53
年代		
50代	34	(37)
60代	19	(21)
70代	29	(32)
80代	9	(9)
不明	1	(1)

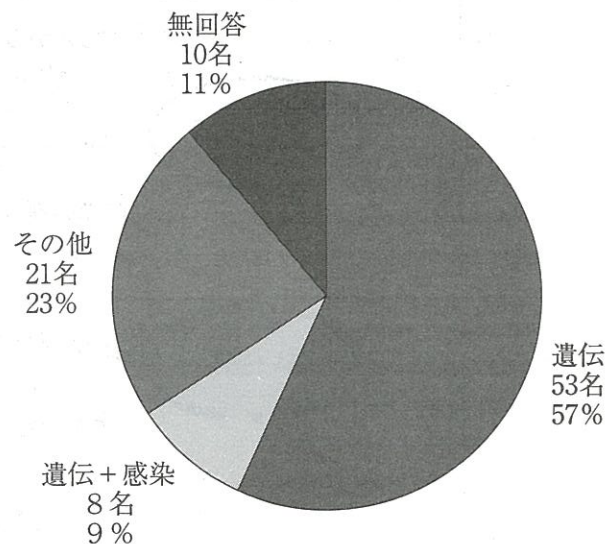


図1 「まき」と聞いてどのように感じるか (n=93)

表2 「まき」にあてはまるもの

脳卒中・脳梗塞	50	ばか	8
頭がいい	39	白痴	4
長寿	36	かたわ	3
結核	24	脳性まひ	2
色盲	20	牛眼	1
らい病（ハンセン氏病）	18	梅毒	1
精神病	18	糖尿病	1
早死	14	がん	1
白っ子	12		
知恵遅れ	11		

複数回答可

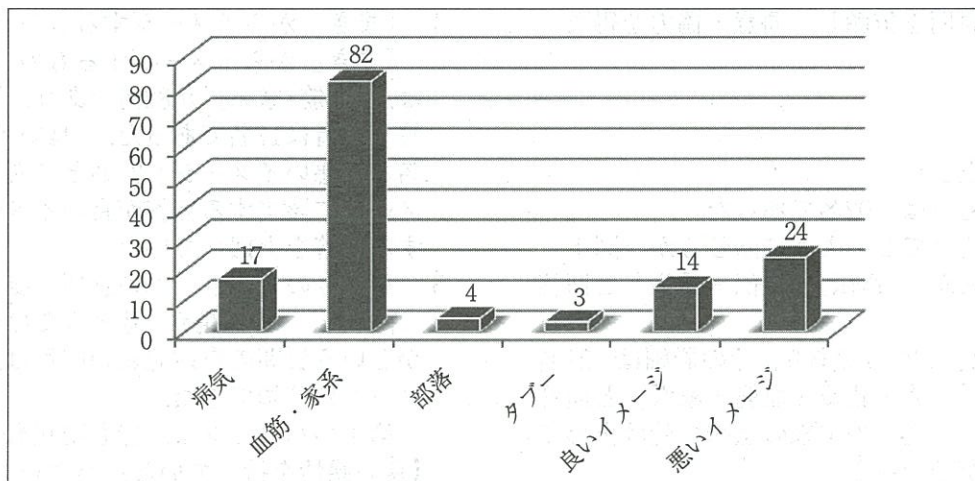


図2 「まき」からイメージするもの

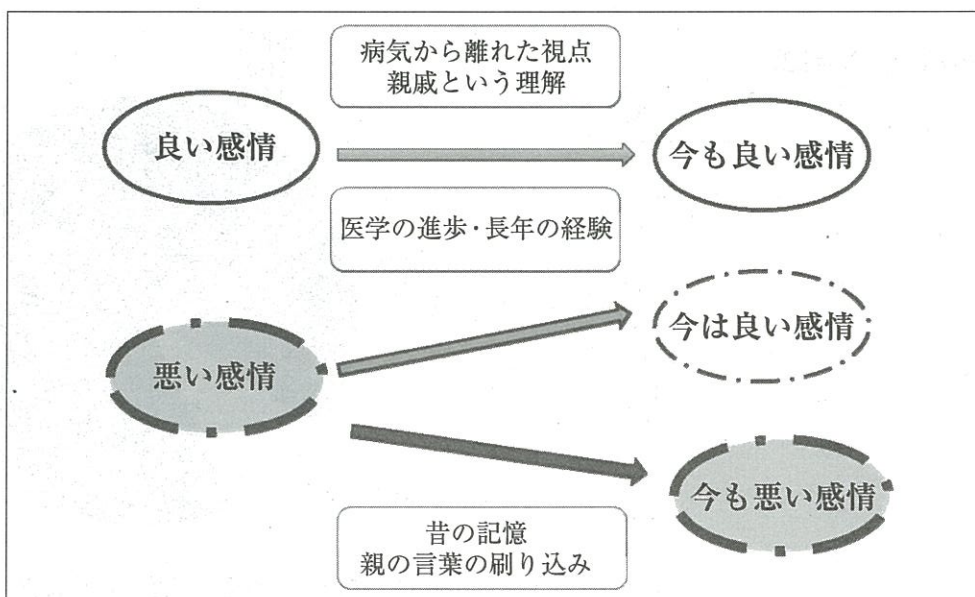


図3 昔と今の「まき」への感情の変化の模式図

ていたが、現在は【良い感情】に変わったパターンであった。第3のパターンは、昔も現在も「まき」に【悪い感情】を持っているパターンであった。

第1の昔も今も良い感情を持っているパターンの群では、「まき」という言葉の解釈が、純粹に親族・血族であり、風習やしきたりを受け継ぐ大切なものと捉えていた。

第2の昔は悪い感情を持っていたが、現在は良い感情に変わったパターンの群では、医学の進歩により病気を正しく認識したことによって、不安感がなくなったこと、長年の経験の中で必ずしも遺伝するものではないと理解したこと、時代の流れとともに世の中が騒がなくなったりしたことから心配しなくなったと捉えていた。

第3の昔も現在も悪い感情を持っているパターンの群では、幼い時の近所に病気のまきの方が住んでいた記憶や親から刷り込まれた否定的な感情から、現在も「まき」に対して悪い感情を抱き続けているようであった。

6. 家族が「まき」の方と結婚することになったらどう思うか (図4)

もし家族が「まき」の方と結婚することになったらどう思うかに対しては、回答が肯定派(31%)、決定困難派(41%)、否定派(28%)の3つに分かれた。

肯定派は、「良いことだと思う」という積極的賛成派と、「特に気にしない」や「本人に任せる」という消極的な肯定派であった。

決定困難派は、「躊躇する」「よく考える」など心の動揺を感じとれた意見とした。

否定派は、積極的反対派と、「あまり良くない」などの消極的否定であった。

VI. 考察

「まき」と遺伝の関わりについての、「ドスマキ」や「結核まき」と呼ばれた一家や一族が、病気を理由に周囲から疎外され差別されていたという事実があったことから、現在「まき」について人々はどのように認識しているのかその実態を明らかにしたいことが、本研究の発端となっている。そして「まき」という言葉は、遺伝や病気と密接な関連のある言葉として、マイナスのイメージで認識され使用されているのではないかと推測し、調査を開始した。病気と遺伝病について地域住民を対象にした調査では、遺伝病に否定的なイメージをもっていたが、本調査結果では、必ずしもマイナスのイメージとしてのみ認識され使用されているのではなかった。「まき」について遺伝を意識しているものの、「まき」を親族・血族としてとらえていること、肯定的な「頭がいい」といったことも受け継がれていくものだと捉えていることであった。これは、血のつながりのある集団としてのとらえ方と、その集団の特性として受け継がれていくものとしてのとらえ方であろう。「まき」からイメージするものとして、92名のうち「血筋・家系」と82名の回答があったことは、「まき」が

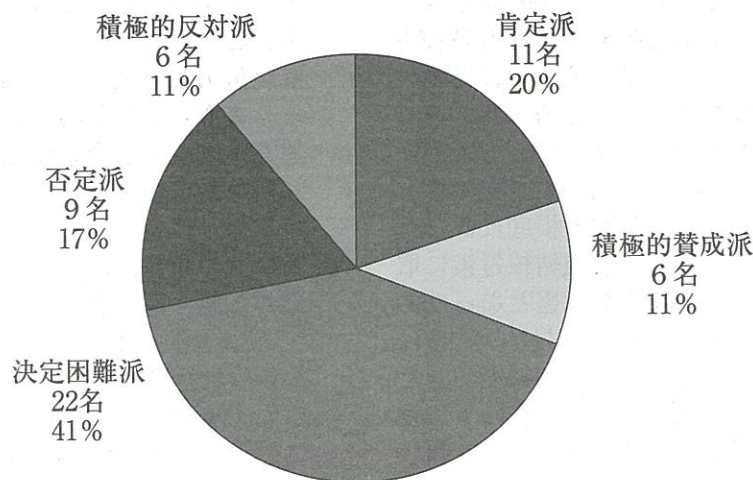


図4 家族が「まき」の方と結婚することになったらどう思うか (n=54)

「病まき」といった認識ではなかったことを示していると考えられる。「まき」の本来の意味は、柳田國男の族制語彙によると、多分ただ「群」というだけであつたろうが、人に在ってはそれが血筋の対立、すなわち先祖を共同にするの否とによって自他を分かち、単位を意識するようになったのは自然である⁸⁾とある。また、受け継ぐものとしての認識は、すべての人が持つ自分・個としてのアイデンティティと、自分の血族や親族のアイデンティティと関連する部分は、誇りや愚かさ、良い面も悪い面も存在し、そのすべてを含めてその血族や親族から受け継ぐアイデンティティであり、「まき」のアイデンティティとして認識されているのではないかと本調査結果から考えられる。

これまで「ドス」と呼ばれたハンセン氏病は、その罹患患者が不遇の差別や処遇を受けてきた歴史がある。現在では遺伝する疾患でないことが明らかとなっているが、かつては優生保護法のもと、断種のために強制的な中絶があつた。かつて医師でさえも「癩は不治である。嚴重に隔離して伝染を防がなければならぬ」「癩患者に於いては速やかに睾丸摘出若しくは精系の裁断を行って子孫を後に遺す事を避けなければならぬ」といった迷信を持っており⁴⁾、このような歴史的背景が、「病まき」のひとつである「ドスマキ」の差別の根底になつたのではないかと考える。また、結核は戦前の近代化のひとつとして盛んにおこなわれていた製糸業などの工場で蔓延し、死の病と恐れられた。ペニシリンによる治療方法が確立するまで根本的な治療はなかつた。結核の治療としては、もっぱら高価な栄養のある牛乳や卵を食することが有効とされ、死の病だけでなく家つぶしの病としても恐れられていた。日本人は、(太平洋)戦争中に外国の医学研究から切り離されていたため、死と病気に対する効果的な治療法の数々について知識を持ちあわせていなかった⁵⁾と言われているが、このことが、「結核まき」の差別の根底にあつたのではないかと考えられる。戦後結核対策に取り組む医療当局にとって大きな障害となつたのは、結核に対する日本人の態度であり、結核はできるだけ隠しておく恥ずかしい病気であるという考え方が根強く、公衆衛生担当官の下に報告されるケースはごくわずかであつた⁶⁾と報告されていたことから、「結核まき」への偏見が推察される。

波平によれば、差別の契機に病気が選択され、特別視や差別観を生み出す病気とは、肺結核とハンセン氏病である。ところが、「あの家は病マケだ」という標識だけは人々によって確認されているものの、いつ頃、その家の先祖のだれが発病したか現在では誰も知らないこともある。ある村落では、最後の患者が発生したのは五十余年も前であるのに、依然としてハンセン氏病はその村落の人々には強い「標識」として存在し続けていた⁷⁾。つまり、結核やハンセン氏病に対する正しい知識の普及と十分な医療による罹患率の減少が確認されるまで、人々の病を恐れる心理が、過去の「病まき」の風習や文化となつていたのであろう。

さらに、病気と関連した「まき」があつたことを知っていても、それが今では時代遅れであると感じており、昔のように神経質になるほどのことではないと捉えている人が多いことも明らかとなつた。このように「まき」に対する人々の認識の変化がみられた。これは、定住型の村社会が徐々に移住型の社会に変化し、血族や一族の意識が薄れつつあること、くわえて医学の進歩に伴い人々に恐れられていた病気の原因などが解明され、情報化社会によって正しい認識が人々に浸透していったためであると考えられる。つまり、都市と農村の流動化、医療の発達や医学の進歩、情報化社会により、「まき」に対する認識構造は変化していると考えられる。人々の「まき」に対する認識が変化したとはいえ、種の保存にかかわる結婚という場面では、肯定・決定困難・否定と意見が分かれ、「まき」を意識する心理が依然として残っており、「まき」を完全に無視できない中高年の思いも明らかとなつた。看護職等の医療者は、東日本特に東北地方に住む人々の文化的背景として、「まき」を意識して対応する必要があると考える。調査結果からも今日では必ずしも「まき」は遺伝病をあらわす言葉や概念ではなくなつてきているが、結婚を考える場面や、家族的に発症する病気の場合には、「まき」を意識する心理が働くことを、医療者は理解しておく必要がある。 「病まき」の契機となる疾患の特徴としては、①慢性的症状を示し、治癒に長期間を必要とする。②場合によっては、治癒することなく徐々に悪化し、死に至る。③場合によっては、著しい後遺症状を残す。④ハンセン氏病、結核については、家内感染の傾向が強く、また、同一家

族から複数の患者が出る傾向がある⁹⁾の4つがあげられている。新たに、「病まき」にみなされる疾患として、精神疾患とがんが病マケにみなされる病気として浮かび上がってきている¹⁰⁾という。精神疾患やがんのみならず、多くの慢性疾患の特徴は、「病まき」にみなされる疾患の特徴の①慢性的症状を示し、治癒に長期間を必要とする②場合によっては、治癒することなく徐々に悪化し死に至るに当てはまる部分がある。また、がんや糖尿病は多因子遺伝病であり、単一遺伝子の変異だけでは発症しないが、環境因子が加わることによって発症しやすい疾患である。家族性大腸がんや、卵巣・子宮がん発症の責任遺伝子、糖尿病の発症に関与する遺伝子が発見されてきている。遺伝看護の対象は、単一遺伝病だけでなく脳梗塞やがんや糖尿病といった多因子遺伝病を抱える対象へと広がってきている。慢性疾患の中でも、多因子遺伝病は、受け継いでいく遺伝子が基盤にあることから、新たな「病まき」となる可能性がある。時代の変化によって、それまでの風習や疾患についての考え方が変化しているため、人々の認識を把握し、新しい差別の契機となることを避けなければならない。人々が正しい知識を持って病気を

認識できるように、啓蒙活動と正しい知識を提供できる場へ人々をつなぐこと、患者や家族が周囲から孤立しないように、そこに住む人々の文化的背景を尊重してケアすることが重要だと思われる。

V. おわりに

東北地方における「まき」と遺伝に関する中高年の認識の調査を行ったところ、「まき」を「病まき」や遺伝病として認識しているだけでなく、本来の意味である親族・血族として認識していることが明らかとなった。慢性疾患の中の多因子遺伝病が、あたらな「病まき」とならないよう、人々が正しい知識で病気を認識できるようケアすることが課題である。

謝辞

本研究にご協力いただきました皆様に心より感謝申し上げます。

なお、本研究の一部を第6回日本遺伝看護学会学術大会において発表した。

Abstract

Purpose: It aims to clarify the realities of the recognition in middle and advanced aged people concerning "Maki" and the blood relation and the inheritance in the Tohoku region.

Method: For 92 men and women in their fifties, living in three prefectures in the Tohoku region, the questionnaire survey was conducted to obtain information on the perception, image and applicable diseases they could think of. The methods of analysis were a simple tabulation.

Result: As for the perception on "Maki", 68% of the respondents answered as "Inheritance" or "Inheritance + Infection". As for the image applicable to "Maki", "Tuberculosis", "Hansen's disease", "Smart", "Buphthalmus", "Diabetes", "Cancer", and "Apoplexy". Regarding the change in their feelings toward "Maki", it became clear that there were three patterns. In answering the question on a marriage between their family member and a "Maki" person, there were three groups: affirmative, difficult to decide and negative.

Consideration: The possible change was observed in the recognition structure for "Maki" with advances in medical science to clarify the causes of such dreaded diseases. But when it comes to marriages, the survey disclosed the feelings among middle-and-advanced-aged people who cannot completely ignore "Maki". Those who nurse should consider "Maki" as one of the cultural contexts of people living in the provinces. We should carefully examine how "Maki" and the diseases of the multi factor inheritance, such as "Diabetes" and "Cancer" are related and take enlightening activities so that the wrong recognition may not be established.

Key words : Maki, Heredity, Middle-aged people